

## 第4章 相模原市の歴史文化

### 第1節 相模原市の歴史文化の特性

最終氷期のグローバルな気候変動は、相模川の河床と流路を変更させ、富士山の高頻度による火山活動によって火山灰が降り注ぎ、悠久の時を経て、幾段にもなる河成段丘を形成しました。それが、広大で平坦な相模野台地であり、奥深い山間部を河川に沿って回廊状につなげる台地であり、相模原の歴史文化が織りなされる先人の歴史舞台となりました。ここでは、本市のさがみはら地域遺産の特徴と地理的・歴史的背景を踏まえて、本市固有の歴史文化にまつわる特性を示します。

#### 1. 山の歴史文化 ―豊かな自然に紡がれる津久井山間部―

豊かな自然が広がる津久井地域は、都市近郊の山林資源の供給地として重視され、仏教文化も広がり、また、甲斐国と接して交通の要衝でもあることから、津久井城など政治の中樞も置かれ、これらが一体となって「山の歴史文化」が育まれています。

津久井地域は、中世には「奥三保」や「津久井領」とよばれ、円覚寺（鎌倉市）の法堂建立や中世小田原城の建設などで重要な木材供給地の役割を果たしてきました。中世の仏教文化が色濃く残り、地域色の強い石造文化圏を形成しています。隣国甲斐国との境目の城として津久井城が築かれ、近世の徳川政権下では根小屋に陣屋が置かれ、政治的にも重要な地域でありました。江戸時代に幕府が直轄支配した「御林」として手厚く統制・管理され、代官江川英龍にちなむ「江川ヒノキ」（市登録）の植林など、今日の豊かな山林資源につながっています。また、この土地に長らく大規模な開発が入らなかったことが、貴重な天然記念物や自然環境、眺望景観、山に抱かれた谷戸や里山の文化的景観の保存を可能にしました。

都市に近接した津久井地域は、このような山の歴史文化を身近に触れることのできる場所として、都市住民を引き付ける大きな魅力となっています。

#### 2. 台地の歴史文化 ―開発の歴史を語る相模野台地―

相模原地域の広大な相模野台地は、台地に人類が足を踏み入れて以来、河川沿いを中心に暮らしの拠点をおきつつも、台地上でその時代時代に求められる開発が繰り返された重層性によって「台地の歴史文化」が育まれています。

国内最古の建物跡が発見された田名向原遺跡は、最終氷期において動物資源を求めて繰り返し狩猟の場として訪れた結果であり、縄文時代の勝坂遺跡は集落周辺の自然環境をクリ林などの有用な植生に変え、集落が数百年も維持されました。古墳時代には相模川左岸に広がる沖積低地を水田地帯として利用し、その高台にあたる台地上に東原古墳や谷原古墳群など多くの古墳と集落を形成しました。古代には境川左岸の多摩丘陵で焼き物（須恵器、瓦）や木器など手工業生産の開発を手掛けた人々が、境川右

岸の広大な台地上で相原遺跡群や橋本遺跡、矢掛・久保遺跡などの古代集落を営みました。中世には境川右岸の上矢部や相模川左岸の磯部に居館や城が築かれ、周辺領地が開発されました。江戸時代には手つかずの広大な原野で「新田開発」（畑地開墾、植林）が進み、清兵衛新田は相模国における江戸時代最後にして最大の新田開発でした。

近代に入ると「相模原開田開発計画」が叫ばれ、昭和12（1937）年以降に首都近郊の広大な相模野台地に陸軍施設が立て続けに移転し、軍都として国内最大の区画整理事業による市街地整備が進められ、今日の都市形成の礎となりました。

このように台地の歴史文化は、本市の人類史以来の人々の多様な開発の積み重なりにより、様々な記念物や建造物、土木遺産、文物が残り、そこに暮らす人々によって伝統行事や民俗芸能が継承されるなど、重層的な開発の記憶を物語っています。

### 3. 水の歴史文化 一人々の生活に底流する相模川の恵み

市域を貫流する相模川をはじめとする河川や、津久井地域の山間部に水を溜めた相模湖などの湖、相模原地域の相模野台地に多くの湧水や宙水が分布し、これらの水源が時代を通して人々の生活を支え、「水の歴史文化」を育んできました。

河川沿いには500か所以上の遺跡が分布し、主に旧石器時代から平安時代までの水を確保した生活の痕跡が確認できます。豊富な湧水が鳩川へと注ぐ勝坂の有鹿谷は、古墳時代に水辺の祭祀が繰り返し行われ、特殊な祭祀遺物が多量に出土しています。段丘崖裾から湧出する湧水地点を石積みで囲った「ヤツボ」は、近世以降に貴重な水場として利用され、水神が祀られて大切にされてきました。宙水を起源とする沼地や窪地には、「でいらぼっち伝説」が地域で言い伝わっています。

近代には、旧三井村<sup>きゅうみ い</sup>から横浜まで導水する日本初の近代水道である横浜水道が明治20（1887）年に敷設され、近代の文化遺産として青山の取水口や沈殿池、水道神社のほか、青山隧道、城山隧道、川尻隧道などレンガ積みの隧道が残されています。さらに、昭和13（1938）年に始まる相模川河水統制事業は当時国内最大の水利事業で、昭和22（1947）年に国内では戦後初の完成となる相模湖相模ダムをはじめ、水道、工業用水、治水、発電に係る様々な施設がつくられました。また、戦後の食糧難を打開すべく、国内初の大規模な畑地灌漑事業が相模野台地で進められ、虹吹分水池や東西幹線・支線の灌漑用水路が整備されました。

豊富な水資源は、先史時代から現代まで人々の生活を支える恵の水をもたらし、その恵みに感謝の祈りを捧げます。近代においては国内初の近代水道から国内最大の水利事業へと発展し、特徴的な近代化の地域遺産が生まれました。このように、市内には水に関わる地域遺産を広域に見ることができます。

#### 4. 祈りと交流の歴史文化 ―地方と結ぶ相模の玄関口―

時宗開祖の一遍上人により開かれた無量光寺、津久井山間部に中世から浸透する仏教信仰の広がり、これらは、当麻山道や八王子道、津久井道、甲州街道を伝って信仰と交流が拡大し、「祈りと交流の歴史文化」が育まれてきました。

本市域は、古代に既に都とのつながりが存在し、仏教文化の伝来により、古代集落から様々な仏教遺物の出土を見ることができます。特に中世の津久井地域に仏教信仰が広まり、仏像彫刻、鰐口、仏画など多くの文化財が残されています。相模原地域では相模川渡河点の街道筋に、時宗の根本道場である無量光寺が開かれ、山門などの寺院建築や宝篋印塔、五輪塔、板碑といった多くの中世供養塔、彫刻が所在しています。国境に近い境目の地にあって、敵に備えるための中世武士団の居館や津久井領を治める津久井城などの城郭が築かれました。室町時代に武蔵国への起点となる当麻に関所がおかれ、さらには近世に甲州道中（甲州街道）が整備され、小原宿、与瀬宿、吉野宿、関野宿が設けられました。これら、人々の交流が拡大したことが、地域の歴史文化に大きな影響を与えました。

このように、本市域は今日まで関東周辺と各地を結ぶ交通の要衝であり、人々の往来や信仰の普及によって生まれた祈りと交流の歴史文化を見ることができます。

### 第2節 相模原市の歴史文化のまとめ

本市の歴史文化は、市域西半の津久井山間部と市域東半の相模野台地という異なる様相の地形景観を相模川が貫流し、それぞれの環境の中で特異な歴史文化を紡ぎ、また、時にそれらが一体となった歴史文化を築いてきました。山間部と台地、愛甲郡と高座郡、津久井領と東郡、山村文化と農村文化、山林資源と土地開発、自然と都市のような「対極」性がある一方で、関東平野への玄関口としての人々の往来と文化の交流、祈りの文化の広がり、日本初の近代水道や近代測量、相模川河水統制事業から相模原開発畑地灌漑事業にみる広域的なつながりといった「一体」性もあります。本市の歴史文化のまとめは、「山・台地・水と祈り・交流が織りなす対極と一体の複合性の歴史文化」といえます。



図 4-1 相模原市の歴史文化の特性 概念図